

柿沼しのぶ。39歳。埼玉県新座市出身。

自宅でピアノ教室を開いていた母と、市役所に勤める父の間に生まれる。

保育園、小学校と、周りになじむことができず、陰鬱な子供時代を過ごす。休憩時間には、友達が縄跳びやボール遊びをして遊ぶ中、ひとりグラウンドの隅の方で、近所の野良猫をフェンス越しに眺めて過ごしていた。

中学校も同じようなものだったが、その頃から、歌手への憧れを抱くようになる。安室奈美恵やSPEED、浜崎あゆみといった輝く歌手たちの姿を目にするたびに、陰のないきらびやかな明るい世界に身を置く自分を想像した。テレビで歌番組を観ている時、そして、お風呂で歌を口ずさんでいる時、その時だけは、別の自分になることができた。学校での嫌なことも忘れることができた。

その後、洋裁学校へと進み、卒業後はフリーターとして職場を転々とする日々。この頃には実家を出て、成増にある「コーポ青山」というアパートでひとり暮らしをはじめ。アルバイトをしつつ、歌手のオーディションを受け続ける日々。アルバイト先の間人間関係に悩み、オーディションも結果が出ない状況の中、唯一の癒しは、近所の「Hotto Motto」で働く爽やかなイケメン。男性目当てに、毎夜、＜特から揚げ当（6個入り）＞を購入する。通い詰めるうちに、注文せずとも、「いつものですね」と言われるようになる。いつか想いを伝えようと思っていたものの、辞めたのか、ある日を境にその男性の姿を見かけなくなった。失意の中、はじめて自身で歌を作る。タイトルは『6個の恋』。

窮状を見かねた両親からは「実家に戻ってこい」とことあるごとに言われるが、「あと3年だけ時間をちょうだい……」と拒否。心機一転、北池袋のマンションへと引っ越す。ペット可のマンションであったため、斑猫（ぶちねこを飼い始める。名前は「モンちゃん」。名前は、マンションの向かいにあったもんじゃ焼き屋「モンちゃん」から拝借。

その頃、『アウト×デラックス』の出演者募集のチラシをたまたま目にする。番組を観たことはなかったが、出演者欄に、タイプの顔である「矢部浩之」を見つけたため、何となく応募してみることに。番組への興味度合いとは裏腹に、あれよあれよと話は進み、番組への出演が決定することに。

番組での活躍が浸透するにつれ、バイト先や街中で声をかけられることが増えてきた。子供の頃から、誰かに声をかけられることなどなかったため、戸惑いながらも、嬉しく思う。ただ、相変わらず、オーディションには落ち続ける。それどころか、「う～ん、アウト×デラックスのイメージが強すぎて無理だね」と言われることもしばしば。

夢の実現のため、番組を降板することも頭をちらついたが、すぐに振り払う。私の居場所はここ。小学校、中学校、高校。アルバイト。周りの人になじむことができず、変人扱いされる日々。でも、ここでは違う。私は求められている。ステージの上じゃなくても、歌うべき歌はなくとも、私は必要とされいている。他のどこでもない。ここが私のステージ。そう思い返すしのぶ。

今日も朝10時に起床。モンちゃんの頭を撫でながら、一日の予定に頭をめぐらせる。椎名町の駅前前で新装オープンのパチンコ屋のビラ配り。それが終わり次第、湾岸スタジオで『アウト×デラックス』の収録。帰宅したら、スウェットに着替え、向かいのもんじゃ焼き屋「モンちゃん」で、もちもち明太バターコーンを注文。

上半身を起こし、大きく伸びをするしのぶ。

「柿猫だにゃー」と叫ぶと、モンちゃんが、びくっと身体を震わせる。

今日も、一日が始まる。